

演題名：乳がん罹患時の妊孕性温存治療の選択と葛藤への対応

氏名：下西祥子<sup>1)</sup> 北山利江<sup>1)</sup> 藤岡聡子<sup>1)</sup> 福田愛作<sup>1)</sup> 森本義晴<sup>2)</sup>

所属：<sup>1)</sup> 医療法人三慧会 IVF 大阪クリニック <sup>2)</sup> HORAC グランフロント大阪クリニック

#### 【発表要旨】

近年の医療の進歩によりがん患者の生存予後は改善している。同時に、がん治療による生殖機能の低下や廃絶に追い込まれることも多く、治療後の妊孕性の温存が重要視されるようになってきた。がんと診断された患者は、多発する問題の自己解決が同時に求められ、妊孕性温存の治療を受けるか否かを自己決定する必要性が生じ、短期間にいくつもの選択を余儀なくされる。

今回乳がんと診断され、がん治療と妊孕性温存のための治療選択の決断から治療開始、がん治療後、不妊治療再開までの支援の機会を得た。患者は乳がんによる生命への危機と妊孕性の危機を合わせ持ち、妊孕性温存治療にて胚凍結実施したが、乳がん予後への影響に対する不安も表出していた。患者の複雑な心情を理解しながら関わり、様々な場面での支援を経験した為、生殖医療相談士でもある看護師の立場から、専門チームの対応と合わせて報告する。